

《資料》

明治中期の蘭筵生産

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 明治中期にいたる時期の蘭筵生産の推移
 - (1) 明治中期にいたる時期の蘭筵生産の把握
 - (2) 明治中期にいたる時期の蘭筵生産の推移
- 3 1894（明治27）年の蘭筵生産
 - (1) 全国的概況・府県別状況
 - (2) 蘭筵の主要生産県
 - (3) 主要生産県における生産状況
- 4 主要蘭筵生産の類型

1 はじめに

1884（明治17年）年度を第1回として刊行された「農商絡統計表」の蘭筵統計において、1894（明治27）年は、製品の種別別生産高（数量・価額）がほぼ整い、また製造戸数をはじめ把握している年である。ここにはじめて蘭筵生産についてかなりの統計的な検討を行なうことができることとなった。小論では、この1894（明治27）年にいたる過程と、1894年の蘭筵生産についての基礎的な統計資料の整理と検討を行なうものである。

2 明治中期にいたる時期の蘭筵生産の推移

(1) 明治中期にいたる時期の蘭筵生産の把握

明治中期にいたる時期の蘭筵生産が把握できる年度は、1884（明治17）年、1885（明治18）年、1887（明治20）年、1892（明治25）年、そして1894（明治27）年で、以後は毎年度である。1884年、畳表製造で備後・琉球・計で数量のみである。1885年は畳表産額で、備後表・琉球表・合計について数量と価額である。1887年は畳表類産額で、備後表・琉球表・真座・合計について数量と価額である。1892年は畳表で畳表と真座について数量と価額であるが、備後・琉球の区分がなくなっている。1894年から大きく整えられた。大きくは畳表及び真座類と輸出向莞筵の二つの統計となった。畳表及び真座類は畳表と真座類にわけて、前者は備後・琉球・其伽について数量と価額、真座類は本間真座・並真座について数量と価額、そして其他価額のみがあり、畳表と真座類の合計の価額がある。輸出向莞筵は製造戸数・数量・価額である。

『第9次農商務統計表』には、「畳表 明治二十年ニ於テ十八府県ヨリ報告セシ畳表ノ数三百十三万六千九百二十一枚、其価格三十一万八千八百六十三円、琉球表ノ数三百六十九万五千三百八十七枚、其価三十二万八千八百零一元、真座ノ数四百五十三万七千八百零五枚、其価二十五万二千三百三十五円ナリシカ、二十五年ニ於テハ之ヲ生産セシ府県ノ数三十有五ニ達シ従ツテ其数大ニ増加セリ。然レトモ此ハ比較スヘキモノニアラサルヲ以テ此ニ掲載セス」と記している。畳表の報告18府県から生産35府県に増加している1887年と1892年の生産高について「比較スヘキモノニアラサル」と、把握が不十分であったかのごとき叙述であるが、不備であろう。

このように1894（明治27）年度に大幅に整うまでの期間は、その把握は年によって異なっている。しかし、ここではこの時期について整理しようというものである。

(2) 明治中期にいたる時期の蘭蓆生産の推移

第1表は、この1894（明治27）年にいたる時期の蘭蓆生産の推移を示すものである。

1884（明治17）年に196万6546枚であった畳表は、1885年には467万4575枚へと増大し、さらに1887（明治20）年には683万2308枚、1892（明治25）年には973万4969枚となっている。しかし、その後の1894（明治27）年には374万5413枚へと大きく減少している。この1894年には畳表は備後・琉球別のほか他にという項目があるが、その数は158万1246枚となっているが、これがそれまでは備後・琉球に入っていたものを分離したのか、あらたに取りあげたものかはいかなかは判明しない。いずれにしても、これを加えても1894年は大きく減少している。このことは価額についてもいえる。価額は1885（明治18）年からしか記載がないが、この年28万0648円であった備後・琉球は、1887年には64万7663円、1892年には123万1853円となった後、1894年には92万3204円に減少している。1894年を100とするならば、数量では1884年52.5、1885年は124.8、1887年には182.4、そして1892年は259.9となる。価額表示では1885（明治18）年30.4、1887年142.5、1892年133.4ということになる。いずれにしても1892年から1894年にかけては減少しているのである。これに対して、莞蓆は、1892年にはじめてでてくるが、17万3844本と3万9709巻であったものが、1887（明治20）年には31万0287本と5154枚となっていて、基本である本数でいえば2倍近い増加である。価額では1894年を100として、1885（明治18）年は8.3、1892年は66.2であり、この間に急速に増加したといえるのである。

このように1894年にいたる時期は畳表においてよりも莞蓆における増加が顕著であったといえるのである。

第1表 蘭産生産高の推移

		備後	琉球	備後・琉球	其他	計	真産	蘭産	合計
生 産 額	1885(明治18)年	241,686	38,962	280,648	—	280,648	—	—	280,648
	87(20)	318,863	328,801	647,663	—	647,663	252,335	—	899,998
	92(25)	—	—	1,231,853	—	1,231,853	449,192	563,800	2,244,845
	94(27)	403,035	520,169	923,204	234,494	1,157,698	431,336	2,036,894	3,627,081
	95(28)	461,140	749,259	1,210,399	296,119	1,506,518	423,686	3,790,286	5,720,490
	96(29)	466,417	1,321,393	1,787,810	372,857	2,160,667	488,323	2,183,721	4,832,711
	97(30)	500,517	1,152,818	1,653,335	287,965	1,941,300	491,489	3,217,482	5,650,271
	一八九四年を100とした指数	85(18)	60.0	7.5	30.4	—	24.2	—	—
87(20)		79.1	63.2	142.5	—	55.9	58.5	—	7.7
92(25)		—	—	133.4	—	200.2	104.1	27.7	61.9
94(27)		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
95(28)		114.4	144.0	131.1	126.3	130.1	98.2	186.1	157.7
96(29)		115.7	254.0	193.7	159.0	186.6	113.2	107.2	133.2
97(30)		124.1	221.6	199.1	122.8	167.7	113.9	158.0	155.8
生 産 量	1884(明治17)	1,428,277	538,269	1,966,546	—	1,966,546			
	85(18)	3,880,024	794,551	4,674,575	—	4,674,575			
	87(20)	3,136,921	3,695,387	6,832,308	—	6,832,308	4,537,805		
	92(25)	—	—	9,734,969	—	9,734,969	6,672,595	173,844 (39,709枚)	
	94(27)	1,910,396	1,835,017	3,745,413	1,581,246	5,326,659	3,537,891	310,287 (5,154枚)	
	95(28)	2,080,076	1,073,020	3,153,096	1,500,134	4,653,230	3,652,622	577,181 (8,620枚)	
	96(29)	2,060,092	6,560,672	8,620,764	2,048,672	10,669,436	3,278,903	340,508 (短物531枚)	
	97(30)	2,001,391	1,834,722	3,836,113	1,674,742	5,510,855	3,555,916	478,983 (54,220巻)	
		(449,457本)	(449,457本)		(449,457本)			(5,046枚)	
一八九四年を100とした指数	1884(明治17)	74.8	29.3	52.5	—	128.3	160.6	—	
	85(18)	203.1	43.3	124.8	—	36.9	—	—	
	87(20)	164.2	201.4	182.5	—	87.8	—	—	
	92(25)	—	—	259.9	—	182.8	236.1	—	
	94(27)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
	95(28)	108.9	58.5	84.2	94.9	87.4	103.2	186.0	
	96(29)	107.8	375.5	230.2	129.6	200.3	92.7	109.8	
	97(30)	104.8	99.98	102.4	105.9	103.5	100.5	154.4	

註 1) 第1次, 第2次, 第4次, 第9次, 第11次~第14次の『農商務統計表』より作成。
 2) 単位は生産額は円, 生産量は量表及び, 真産は枚, 蘭産は本を基本とする。
 3) 指数は()内は除外。

3 1894（明治27）年の蘭筵生産

(1) 全国的概況・府県別状況

この1894（明治27）年にいたり、畳表・真座・花筵という蘭筵の全体について生産把握が行なわれた。それは、畳表及真座畳と輸出向莞筵という二つの表にわかれているが、畳表及真座では、備後・琉球・其他、真座は本間真座・並真座・其他という種類ごとに数量と価格が記載されている（ただし真座の其他は価額のみ）。輸出向莞筵では製造戸数と生産数量・価格が表示されている。

このように、蘭筵生産についての全体を把握しているのであり、これによって蘭筵生産の状況がようやく明らかになるのである。その概括はつぎのようになる。

畳表及び真座類

製造戸数	61,874戸		
畳表	備後	1,910,396枚	403,035円
	琉球	1,545,085枚	180,104円
	其他	1,581,248枚	234,494円
	合計	(5,036,429枚)	817,633円
真座	本間真座	684,701枚	684,701円
	並真座	2,853,190枚	178,426円
	其他	—	112,455円
	合計		975,582円
価格合計			1,248,969円

七島蘭

製造戸数	19,778戸		
		289,932枚	340,065円

輸出向莞筵

製造戸数	6,442戸		
		310,287本	2,036,894円
		5,154枚	1,394円
合計		—	2,038,288円
総計	88,094戸		3,627,322円

七島蘭莖を真座類に加えると、真座類は131万5647円となり、畳表及真座類の合計は158万9034円となる。製造戸数は畳表及真座類全体で8万1652戸である。

1戸あたり生産高は、畳表及真座類は20円18銭6厘、七島蘭莖は17円19銭4厘、七島蘭莖を加えた畳表真座類全体では、19円46銭1厘となる。輸出向莞莖は316円40銭6厘である。蘭莖全体では41円17銭6厘である。ただし前述のように製造戸数は輸出向莞莖の製造戸数が欠落している県が多く、ことに莞莖においてはそれが多くみられ、したがって莞莖をも含む全蘭莖については正確ではない。

以上が統計的に一応整った1894（明治27）年の全国概況である。つぎに府県別状況のみよう。

第2表はこの年の蘭莖生産を府県別に示したものである。蘭莖は37府県で生産されている。

生産額の多いのは、第1位は岡山で147万4551円、全国中の39.6%、つづいて広島67万4676円・18.1%、大分47万6783円・12.8%、福岡27万3278円・7.3%、石川12万1704円・3.3%、静岡10万6890円・2.9%、熊本6万7297円・1.9%、高知4万8376円・1.3%、島根4万4463円・1.2%、徳島4万0635円・1.1%である。これに、滋賀、鹿児島以下がつづくが、全国中の占有率はゼロ・コンマ以下である。徳島までの上位10県で全国の89.3%を占めるのである。この上位府県への集中の度合はこれ以後もほとんどかわらず、また上位府県もほぼかわらない。主要蘭莖生産県が明確となり、蘭莖生産地が形成されていることを示しているといえよう。

第2表 府県別蕎麥生産

1894年(明治27)年

	生産額(円)			製造戸数(戸)			構成比(%)		
	合計	疊表及 蕎麥類	輸出向 莞莖	合計	疊表及 蕎麥類	輸出向 莞莖	合計	疊表及 蕎麥類	輸出向 莞莖
岡山	1,474,551	226,081	1,248,470	530	265	265	39.56	13.39	61.25
広島	674,676	256,926	417,750	(10,237)	10,237	—	18.10	15.21	20.50
大分	476,783	340,065	136,718	23,447	19,777	3,670	12.79	20.13	6.71
福岡	273,278	141,340	131,938	8,273	6,024	2,249	7.33	8.37	6.47
石川	121,704	96,864	24,840	(2,228)	2,228	—	3.27	5.74	1.22
静岡	106,890	90,265	16,625	(4,391)	4,391	—	2.86	5.34	0.82
熊本	67,297	67,157	140	(2,088)	2,088	—	1.81	3.98	0.00
高知	48,376	33,956	14,420	1,662	1,644	18	1.30	2.01	0.71
島根	44,463	44,463	—	(1,434)	1,434	—	1.19	2.63	—
徳島	40,635	22,175	18,460	(2)	2	—	1.09	1.31	0.91
滋賀	31,640	26,210	5,430	594	593	1	0.85	1.55	0.27
鹿児島	25,219	25,219	—	6,722	6,722	—	0.68	1.49	—
兵庫	22,266	17,857	4,409	121	119	2	0.60	1.05	0.22
香川	19,641	1,634	18,007	12	6	6	0.53	0.10	0.88
福島	17,627	17,627	—	720	720	—	0.47	1.04	—
栃木	17,353	17,353	—	170	170	—	0.47	1.03	—
長野	16,497	16,497	—	960	960	—	0.44	0.98	—
大阪	15,195	15,115	80	(3)	3	—	0.41	0.89	0.00
富山	13,468	13,355	113	(1,023)	1,023	—	0.36	0.79	0.00
京都	11,041	11,041	—	704	704	—	0.30	0.65	—
福井	10,213	10,213	—	964	964	—	0.27	0.60	—
千葉	10,130	9,566	564	1,989	1,759	230	0.27	0.57	0.03
岩手	9,741	9,741	—	7,075	7,075	—	0.26	0.58	—
佐賀	8,462	8,462	—	761	761	—	0.23	0.50	—
山形	7,888	7,888	—	986	986	—	0.21	0.47	—
埼玉	7,881	7,881	—	1,027	1,027	—	0.21	0.47	—
秋田	7,337	7,337	—	719	719	—	0.20	0.43	—
愛知	7,147	7,147	—	443	443	—	0.19	0.43	—
新潟	6,225	6,225	—	545	545	—	0.18	0.37	—
鳥取	5,537	5,537	—	222	222	—	0.15	0.33	—
山梨	4,352	4,352	—	320	320	—	0.12	0.26	—
宮崎	3,407	3,407	—	3,649	3,649	—	0.09	0.20	—
長崎	2,251	2,251	—	864	864	—	0.06	0.13	—
山口	1,553	1,553	—	214	214	—	0.04	0.09	—
三重	1,551	1,551	—	672	672	—	0.04	0.09	—
青森	493	493	—	308	308	—	0.01	0.03	—
神奈川	27	27	—	10	10	—	0.00	0.00	—
全国	3,727,262	1,688,974	2,038,288	88,094	81,652	6,442	100.0	100.0	100.0

註 1) 『第11次農商務統計表』より作成。

2) 製造戸数の()内は輸出向莞莖を欠き、疊表及蕎麥のみ。

(2) 蘭蕈の主要生産県

上位10県への生産の集中は約9割であるということは、蘭蕈生産についての一般的検討はこの上位県について行なうことによって可能であることであろう。以下、この上位県について検討を加えていく。

第3表は、この上位10県への集中の度合を示すものである。

改めて、この上位10県の全国における位置をみよう。上位10県は、生産額は畳表及真座類で78.1%，輸出向莞蕈では98.6%，蘭蕈全体で89.3%を占める。製造戸数では、畳表及真座類は58.9%，莞蕈は96.3%，蘭蕈全体で61.6%である。11位以下の27府県は、畳表及真座類の21.9%，莞蕈は1.4%，

第3表 蘭蕈上位生産県への集中 1894年(明治27)年

		製造戸数 生産額		1戸あたり生産額	全国中のウェイト	
		戸	円		戸数	生産額
上位3県	畳表及真座類	30,279	823,072	27.183	3.7	48.7
	輸出向莞蕈	3,935	1,802,938	458.180	61.1	88.5
	合計	34,214	2,626,010	76.752	38.8	70.5
上位4〜10県	畳表及真座類	17,813	496,220	27.857	21.8	29.4
	輸出向莞蕈	2,267	206,423	91.056	35.2	10.1
	合計	20,078	702,643	34.996	22.8	18.9
上位10県	畳表及真座類	48,092	1,319,292	27.433	58.9	78.1
	輸出向莞蕈	6,202	2,009,361	323.986	96.3	98.6
	合計	54,292	3,328,653	61.310	61.6	89.4
下位29県	畳表及真座類	33,560	369,682	11.016	41.1	21.9
	輸出向莞蕈	240	28,927	120.529	3.7	1.4
	合計	33,802	394,609	11.792	38.4	10.7

註 1) 第2表と同一書より作成。

蘭筵全体では10.7%に過ぎない。

このように上位10県への集中は著しいが、これをさらに上位3県と4～10県にわけてみると、さらに少数県への集中の度合がはげしくなる。畳表及真座類は上位3県が全体の48.7%で全国の約半数を生産し、莞筵は88.5%で9割近いものとなっている。蘭筵全体では70.5%と7割である。これに対して上位7～10県は、畳表及真座類は29.38%、莞筵は10.1%、蘭筵全体で18.9%と2割程度にとどまる。上位3県への集中は顕著である。

この上位10県の1戸あたりの生産は、上位10県は畳表及真座類は27円43銭3厘、輸出向莞筵は323円98銭6厘、合計で61円31銭であるのに対して、下位29県は畳表及真座類11円、輸出向莞筵120円529円、合計で11円79銭2厘であって、両者の格差は明瞭である。さらに上位を3県にのみついてもみれば、畳表及真座類は27円18銭3厘、輸出向莞筵は458円18銭、合計76円75銭2厘であって、その大きさはいっそう明確となる。

以上により上位県の位置は明確となった。蘭筵生産については、この上位県について検討すればよいといえる。

(3) 主要生産県における生産状況

第4表はこの上位県についてのものである。この表にもとづきいくつかの加工表によって主要蘭筵県について検討していく。

第5表は、主要蘭筵県の製品種別ウェイトを示すものである。岡山は輸出向莞筵の実に61.3%を占有し、畳表及真座類においても全国の14.2%を占める。この第3位である畳表真座類でも、畳表は23.3%で最大である。それは畳のなかの備後が47.2%を占めるのである。このように岡山は輸出向莞筵と備後表の最大の産地である。広島は輸出向莞筵は20.6%と岡山につぐが、畳表及真座類では岡山より大きい。真座類は本間真座は全国の19%で福岡につき、並真座は17.4%で同じく福岡につき、其他真座では14.2%で全国第1位というように、いずれも大きく、最大の真座類の産地である。大分はこの

第4表 主要蘭産菜果の蘭産生産

1894年(明治27)年

		産 表 及 真 産										輸 出 向 産	総 計	製 造 戸 数
		産 表				真 産				七 島 蘭	合 計			
		備 後	琉 球	其 他	計	本 間 真 産	並 真 産	其 他	計					
岡 山	数 量	896,850	—	130	896,980	78,988	204,871	—	283,859	—	1,180,839	143,331	/	265
	価 額	190,400	—	5	190,405	7,438	16,017	12,221	35,676	—	226,081	1,248,470	1,474,551	265
広 島	数 量	699,130	40	173,668	872,838	146,685	205,969	—	352,654	—	439,937	75,050	/	10,237
	価 額	166,678	8	20,621	187,299	26,652	31,021	11,946	69,619	—	256,926	417,750	674,676	—
大 分	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	289,932	289,932	31,630	/	19,778
	価 額	—	—	—	—	—	—	—	—	340,065	340,065	※5,154 136,718	476,783	3,670
福 岡	数 量	94,661	136,033	142,957	230,694	256,490	487,140	—	743,630	—	974,324	31,850	/	6,025
	価 額	12,215	15,382	14,178	41,775	50,784	32,795	15,986	99,565	—	141,340	131,938	273,278	2,249
石 川	数 量	—	—	167,281	167,281	2,405	329,381	—	331,786	—	96,615	5,220	/	2,228
	価 額	—	—	62,111	62,111	283	9,630	24,840	34,753	—	96,864	24,840	121,704	—
静 岡	数 量	500	705,550	40,150	746,200	4,450	122,225	—	126,675	—	872,875	14,440	/	4,391
	価 額	524	76,650	4,227	81,401	867	6,717	1,280	8,864	—	90,265	16,625	106,890	—
熊 本	数 量	82,158	296,498	64,291	442,947	850	148,735	—	149,585	—	592,532	10	/	2,088
	価 額	13,207	37,160	6,829	57,196	127	9,719	115	9,961	—	67,157	140	67,297	—
高 知	数 量	119,915	39,350	32,200	191,465	10,240	12,270	—	22,510	—	213,975	2,470	/	1,644
	価 額	16,783	3,253	1,436	21,472	1,199	1,130	10,155	12,482	—	33,956	14,420	48,376	18
島 根	数 量	9,040	38,000	160,675	207,715	79,383	36,146	—	115,529	—	323,244	—	/	1,434
	価 額	1,799	7,220	19,160	28,179	11,076	2,872	2,336	16,284	—	44,463	—	44,463	—
徳 島	数 量	—	22,080	—	22,080	2,470	—	—	2,470	—	24,550	2,450	/	2
	価 額	—	3,675	—	3,675	18,500	—	—	18,500	—	22,175	18,460	40,635	—
全 国	数 量	1,910,396	1,545,085	1,581,246	5,036,727	684,701	2,853,190	—	3,573,891	389,932	8,964,550	310,287	/	61,874
	価 額	403,035	180,104	234,494	817,633	140,455	178,426	112,455	431,336	340,065	1,589,034	※5,154 2,038,288	3,727,262	6,442

註 1) 第2表と同一書より作成。
 2) 製造戸数欄の上段は産表及び真産類、※は七島蘭産の戸数、下段は輸出向産の戸数。
 3) 単位：数量は産表及真産、七島蘭は枚、輸出向産は本(ただし※は枚)、価額は円。

第5表 主要蕨産業県の蕨産生産の全国における比率 1894年(明治27)年

	畳 表 及 其 産 類										輸出向 莞 産
	畳 表				蕨 産 類				七島蘭	合 計	
	備後	琉球	其他	計	本間 真産	並真産	其他	計			
岡山	47.2	—	0.00	23.3	5.3	9.0	10.9	9.3	—	14.2	61.3
広島	41.4	0.00	8.8	22.9	19.0	17.4	10.6	16.1	—	16.2	20.6
大分	—	—	—	—	—	—	—	—	100.0	21.4	6.7
福岡	3.0	8.5	6.0	5.1	36.2	18.4	14.2	23.1	—	8.9	6.5
石川	—	—	26.5	7.6	0.20	5.4	22.0	8.1	—	6.1	1.2
静岡	0.13	42.6	0.02	10.0	0.62	3.8	1.1	2.1	—	5.7	0.82
熊本	3.3	20.6	2.9	7.0	0.90	5.4	0.10	2.3	—	4.2	0.00
高知	4.2	1.8	0.06	2.6	0.85	0.63	9.0	2.9	—	2.1	0.71
島根	0.45	4.0	8.2	3.5	7.9	1.6	2.1	3.8	—	2.8	—
徳島	—	2.0	—	0.45	13.2	—	—	4.2	—	1.4	0.91
全国	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

註 1) 第4表より作成.

第6表 主要蕨産業県の蕨産の構成 1894年(明治27)年

	畳 表 及 其 産 類										輸出向 莞 産	合 計
	畳 表				蕨 産 類				七島蘭	合 計		
	備後	琉球	其他	計	本間 真産	並真産	其他	計				
岡山	12.9	0.00	0.00	12.9	0.50	1.1	0.83	8.3	—	15.3	84.7	100.0
広島	24.7	0.00	3.1	27.8	4.0	4.6	1.8	10.3	—	38.1	61.9	100.0
大分	—	—	—	—	—	—	—	—	100.0	100.0	—	100.0
福岡	4.5	8.6	5.2	15.3	18.6	12.0	5.8	36.4	—	51.7	48.3	100.0
石川	—	—	51.0	51.0	0.23	7.9	20.4	28.6	—	79.6	20.4	100.0
静岡	0.49	71.7	4.0	76.2	0.81	6.3	1.2	8.3	—	84.5	15.6	100.0
熊本	19.6	55.2	10.2	85.0	0.19	14.3	0.17	14.8	—	99.8	0.21	100.0
高知	34.7	6.7	3.0	44.4	2.5	2.4	21.0	25.8	—	70.2	29.8	100.0
島根	4.1	16.2	4.3	63.4	24.9	6.5	5.3	36.2	—	100.0	—	100.0
徳島	—	9.0	—	9.0	45.5	—	—	45.5	—	54.6	45.4	100.0
全国	11.1	5.0	6.5	22.5	3.9	4.9	3.1	11.9	9.4	43.8	56.2	100.0

註 1) 第4表より作成.

分類での畳表、真座類の生産はまったくなく、また、輸出向莞莖もない。七島蘭が全国の100%を占め、これによって全国の第3位となっている。福岡は畳表では全国の5.1%にすぎないが、真座類は23.1%を占める最大の産地である。本間真座、並真座、其他真座のいずれにおいても全国第1である。輸出向莞莖も6.5%である。石川は備後・琉球ともにまったくなく、真座、ことに並真座が全国の5.4%、其他真座が22.0%を占め、この真座類と輸出向莞莖によって第5位となっている。静岡以下は輸出向莞莖におけるウェイトは小さいか、それがなかであり、畳表、あるいは真座の産地となっている。静岡は畳表の10.0%を占めるが、そのうちの琉球表は全国の42.6%を占める最大の産地である。また熊本も畳表は7.0%と全国第4の大きさであるが、畳表のうちの琉球は全国の20%を占める、静岡につぐ産地である。高知は備後表が全国の4.2%、其他真座が9.0%、島根は其他畳表が全国の8.2%、本間真座が7.9%、徳島は本間真座は全国の13.2%と広島につぐ産地である。

第6表は、この主要蘭莖県の蘭莖の構成を占めすものである。岡山は全国第一の畳表産地ではあるが、それを上回る輸出向莞莖があり、それが84.7%を占める、畳表産地として以上の輸出向莞莖産地である。広島も岡山につぐ畳表の産地でありながら蘭莖全体としては輸出向莞莖が全体の61.9%を占めるところとなっている。ここは岡山よりも畳表、真座類のいずれにおいても一定程度あり、多様な蘭莖産地となっている。大分は七島蘭莖のみである。福岡は畳表及真座類が51.7%と輸出向莞莖の48.3%を上回った。主要蘭莖県のなかで真座類のウェイトが最も大きく、それに本間真座、並真座、其他真座のいずれにおいてもである。また畳表も備後、琉球、他のいずれも4～5%ずつある。多様な蘭莖物の産地となっている。石川は、其他畳表が51%を占め、並真座7.9%、其他真座20.4%、そして輸出向莞莖20.4%からなる。静岡は畳表、ことに琉球表の71.7%という畳表が中心である。熊本は琉球表55.2%、備後19.6%という畳表の産地である。真座類では並真座が14.3%である。高知は備後表と其他真座であるが、輸出向莞莖も約3割である。島根

は輸出向莞蓴はなく、畳表、真座類ともに多様である。徳島は45.4%を占める輸出向莞蓴と、本間真座45.5%でなりたっている。

第7表は主要県の1戸あたり生産高を示す。

全国平均で畳表及真座は109枚・19円46専1厘、輸出向莞蓴は48.2本（ほかに0.800枚）・316円35銭7厘である。輸出向莞蓴は記載された分の製造戸数で全産額を除いたので、大きく出ている。

主要蘭蓴県にあって徳島は1戸あたりの数量・価額が極端に大きい。ここは製造戸数が2戸となっているが、これは除外して考えた方がよい。ここからいえることは、第一に生産額において岡山が隔絶した大きさであり、これにつぐ広島とともに、それ以外とは隔絶しているということである。第二に、畳表真座をみると数量と価額との関係において蘭蓴県の間にかかなりの相違がある。広島は数量は小さいが価額は大きく、他方、福岡・静岡・熊本・

第7表 主要蘭蓴業県の1戸あたり生産高 1894年（明治27）年

	畳表及真座		輸出向莞蓴	
	数量	価額	数量	価額
	枚	円	本	円
岡山	4,455.99	853.136	540.87	4,711.208
広島	42.97	251.043	---	---
大分	14.66	17.194	8.62 (1.40)	37.253
福岡	161.71	23.459	62.85	58.665
石川	75.08	27.877	---	---
静岡	198.79	20.557	---	---
熊本	283.78	32.163	---	---
高知	130.16	20.665	137.22	801.111
島根	225.41	31.006	---	---
徳島	12,275.00	11,087.500	---	---
全国	109.79	19.461	48.17 (08.00)	316.357

註 1) 第4表より作成。

2) () 内は枚。

島根・徳島などは数量が大きいのに価額は小さい。これは製品の種類が畳表か真座類か、備後表か琉球表か、などによる。第3に、輸出向莞莖は総じて1戸あたりが大きい。

4 主要蘭莖生産の類型

以上、1894（明治27）年に至る過程と1894年の状況を検討してきた。1894年にいたる期間は蘭莖全体が伸張しているが、ことに莞莖の生産拡大が特徴的であった。

蘭莖の生産は少数の県に集中している。それは畳表、輸出向莞莖いずれもである。畳表は大分・広島・岡山の3県で52%を占め、輸出向莞莖は岡山・広島で82%ほどを占める。蘭莖生産はこの岡山・広島・大分の3県である。

このうち、岡山は蘭莖の4割を生産する県であり、とくに輸出向莞莖では6割以上を生産している。本間真座、並真座などの真座類も全国中の相当のウェイトを占める蘭莖生産県である。この岡山は畳表及真座類においても、輸出向莞莖においても1戸あたりの生産額の大きさは抜群であることをみてきた。広島は岡山につぐ蘭莖生産地であるが、岡山以上に多様な蘭莖の産地である。ここには多数の製造戸数があり、岡山以上に広範な蘭莖生産が行われている。大分は、七島蘭のみの産地である。七島蘭草を原料とする七島蘭莖の最大の産地である。

このように畳表真座類生産地帯において急速に輸出向莞莖生産を展開し、生産力的にも高い岡山、より広範な畳表生産基盤のうえに輸出向莞莖を展開し、広汎性において特徴のある広島、七島蘭によって七島蘭莖を広範に展開する大分などという、蘭莖生産県にはいくつかのタイプがある。それらについての検討により蘭莖生産の具体的状況は明らかにすることができるであろう。